K-715

天童市埋蔵文化財調査報告書第22集

天童市塚野目A遺跡

—市道山形・矢野目線整備に係る埋蔵文化財調査報告書—

平成11年3月

天童市建設部建設課
天童市教育委員会

天童市塚野目A遺跡

—市道山形・矢野目線整備に係る埋蔵文化財調査報告書—

序　文

このたび刊行する運びとなった塚野目A遺跡の発掘調査報告書は、天童市埋蔵文化財調査報告書の第22集となります。天童市でも東北中央自動車道や山形新幹線延伸などに伴う開発行為の増加に伴い、埋蔵文化財の調査件数も増加する傾向にあります。

塚野目A遺跡の発掘調査も、市道山形・矢野目線の整備に伴って実施したものです。

このたびの調査では、平安時代に属するとみられる掘立柱(ほったてばしら)の建物跡のほか、古代の排水溝とみられる溝跡、土坑(どこう)、土師器(はじき)や須恵器(すえき)などの遺物が出土しました。

本書を今後の調査研究あるいは普及啓発の一助となるように御活用いただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査のために御指導、御協力くださいました地元の方々、発掘作業員のみなさまをはじめとする関係諸機関、諸氏に厚くお礼を申し上げます。

今後とも適切な御助言、御指導を賜りますようお願い申しあげ、ごあいさつといたします。

平成11年3月

天童市教育委員会

教育長　武田良一

例　言

1　本書は、天童市建設部建設課による市道山形・矢野目線の整備に係る埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、天童市建設部建設課の委託を受け、天童市教育委員会が実施した。

3　調査要項は下記のとおりである。

遺跡名　塚野目A遺跡

所在地　山形県天童市大字塚野目字岸の目北228～北251

遺跡番号　天童市遺跡番号46

調査期間

発掘調査　平成10年9月21日～平成10年10月28日

整理作業　平成10年11月19日～平成11年 3月20日

調査担当

調査員　押野一貴（社会教育課主事）
岡崎友美（社会教育課文化財専門員）

事務局　深瀬正人（社会教育課長）
高橋秀司（社会教育課副主幹）
押野一貴（社会教育課主事）
岡崎友美（社会教育課文化財専門員）

発掘作業　林　愛子、林　ミヨ、大沼モト子、小笠原たけよ、林喜代子、佐藤こう、佐藤保子、大林あさ子、檜松礼三、熊沢平作、後藤庄二、水戸秀雄、木村幸子、森信次

整理作業　木村幸子、関沢千津子、小野由紀子、今田郁枝、明石達子、佐藤みち子、久保典子、工藤希理子

4　本書の執筆は高橋秀司の指導のもと、押野一貴が行った。

5　発掘調査から本書の刊行に至るまで、天童市建設部建設課、山形県教育庁文化財課、㈱山形県埋蔵文化財センター、白田尚氏、白田篤夫氏、白田紹夫氏、白田忠一氏、加藤孫右エ門氏、川崎利夫氏、村山正市氏、鈴木良仁氏、山沢護氏の諸機関・諸氏から御指導・御協力をいただいた。記して深謝の意を表する。

6　本調査で出土した資料は、天童市教育委員会で一括保管する。

本文目次

第Ⅰ章　序 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　遺跡の立地と環境 …… 1
　第３節　周辺遺跡と歴史的環境 …… 3

第Ⅱ章　調査の概要 …… 7

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 8
　第１節　掘立柱建物跡 …… 8
　第２節　土坑 …… 9
　第３節　溝跡 …… 11
　第４節　遺構外出土遺物 …… 13

第Ⅳ章　まとめ …… 15

報告書抄録

挿図目次

第１図　周辺地形及び発掘調査範囲…… 2
第２図　周辺の遺跡…… 4
第３図　遺構配置図…… 7
第４図　001号掘立柱建物跡実測図 …… 8
第５図　002号掘立柱建物跡実測図 …… 8
第６図　009号土坑実測図 …… 9
第７図　009号土坑出土遺物 …… 9
第８図　102・115号土坑実測図…… 10
第９図　102・115号土坑出土遺物…… 10
第10図　001・002号溝跡実測図及び出土遺物…… 11
第11図　003～006号溝跡実測図及び出土遺物…… 12
第12図　遺構外出土遺物(1)…… 13
第13図　遺構外出土遺物(2)…… 14

図版目次

図版１　001・２号掘立柱建物跡、009号土抗
図版２　009号土坑遺物出土状況(1)、(2)001・002号溝跡
図版３　002～004号溝跡
図版４　005・006号溝跡、調査風景
図版５　塚野目Ａ遺跡出土遺物(1)
図版６　塚野目Ａ遺跡出土遺物(2)
図版７　塚野目Ａ遺跡出土遺物(3)

第Ⅰ章　序

第１節　調査に至る経緯

市道山形・矢野目線は、既成市街地と西部地区既存集落を結ぶ幹線道路として、増大する交通を円滑に処理し、都市機能の向上を図るため、平成５年に都市計画決定された道路である。

平成７年度より事業に着手し、平成10年度までに、全体延長1,850mの内、1,150mが一部完成予定であり、引き続き事業が継続され、東西を結ぶ幹線道路として早期完成が期待される道路である。

塚野目地区以西の整備計画は平成11年度以降であるが、道路整備に先立ち路線内の埋蔵文化財の発掘調査を実施することとなった。

これにより、天童市教育委員会では、天童市建設部建設課からの委託事業として発掘調査を実施した。現地での調査期間は、平成10年９月21日から平成10年10月28日までである。整理作業は、平成10年11月19日から平成11年３月20日まで行い、合わせて、報告書の刊行作業を行った。

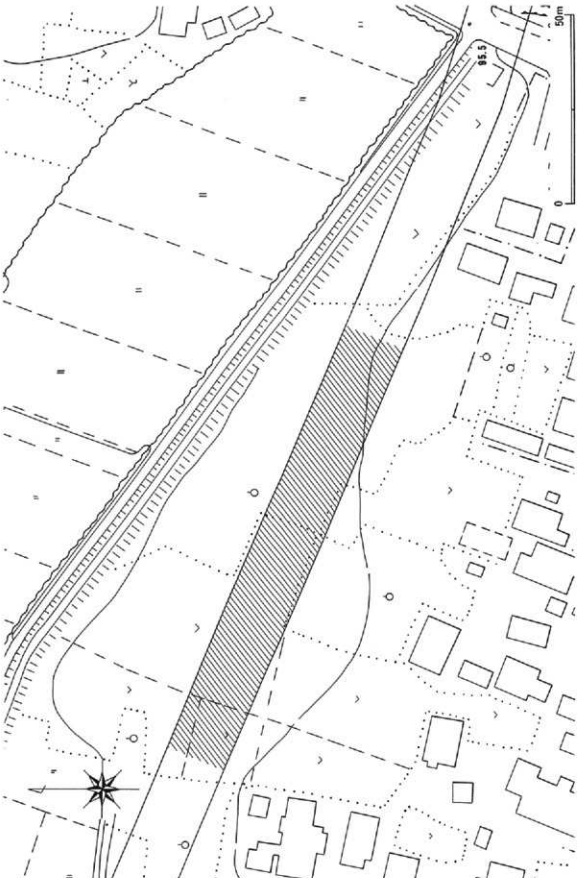
第２節　遺跡の立地と環境

塚野目Ａ遺跡は、天童市大字塚野目字岸の目北地内に所在し、天童市街地の中心部から、西方約3.5km に位置している。標高は約100mを測る。

山形盆地は、山形県内を縦貫する最上川中流区域にある。東部は脊梁山地である奥羽山脈、西部は出羽山地によって画されている。この盆地のやや西側を最上川が北流している。天童市は、山形盆地のほぼ中央に位置し、東は奥羽山脈、南は立谷川、北は乱川、西は最上川によって画されている。

立谷川と乱川は、それぞれ水源を東の奥羽山脈に発し、西方の最上川に流れ込む。この二つの河川は立谷川扇状地、乱川扇状地を形成している。立谷川扇状地は、南を流れる高瀬川のつくる扇状地との合成扇状地であり、北半部が天童市域にはいる。乱川扇状地は、北に流れる白水川、村山野川と押切川によって形成された複合扇状地であり、半径が約11kmに及ぶ大きな扇状地で、南半部が天童市域にはいっている。この二つの扇状地の扇端部には、豊富な湧泉があり、古くから人々の生活と密接な関わりを持ってきている。

最上川に接し、立谷川と乱川の両扇状地に囲まれた、天童市西域平野部の三角形状の地域には、天童低地と呼ばれる最上川によって形成された後背湿地が広がっている。塚野目Ａ遺跡は、この天童低地にあって、立谷川扇状地の北側前縁部と乱川扇状地の南側前縁部に挟まれた場所に位置している。



第1図　周辺地形及び発掘調査範囲

遺跡の北側には、前田川が西流している。本遺跡及びその南側に広がる集落は、前田川によって形成された自然堤防状に立地している。

周辺の地形は、沖積平野の特徴をよく示し平坦であるが、東から西に低く、また南から北に低い傾斜を示している。前田川をはさんで北側と南側では、若干の比高差がある。

本遺跡周辺の土壌は黄褐色土壌が主体であり、水はけがよく、現在はサクランボを中心に果樹、畑作地として利用が計られている。前田川を挟んで北側は水田であり、対照的な土地利用が計られている。

第3節　周辺遺跡と歴史的環境

天童市内の遺跡は、長らく未発掘の遺跡が多く、詳細を語れる状況にはなかったが、近年、東北中央自動車道の整備に係る緊急調査として、天童市内でも6遺跡が調査されている。これまでにない良質かつ大量の遺構・遺物が検出されているので、これらの遺跡を中心として周辺の遺跡及び歴史的環境についてふれておきたい。ただし、現在調査途中若しくは調査終了直後であり、報告書が未刊行であることから、現地説明会資料等を参考とさせていただいた。

天童市内に所在する遺跡は、現在約200箇所を数えるが、古いものほど東側丘陵に沿って分布する。現在確認されているもので最も古いものは、田麦野地区、荒谷地区に所在し、縄文時代前期のものである。

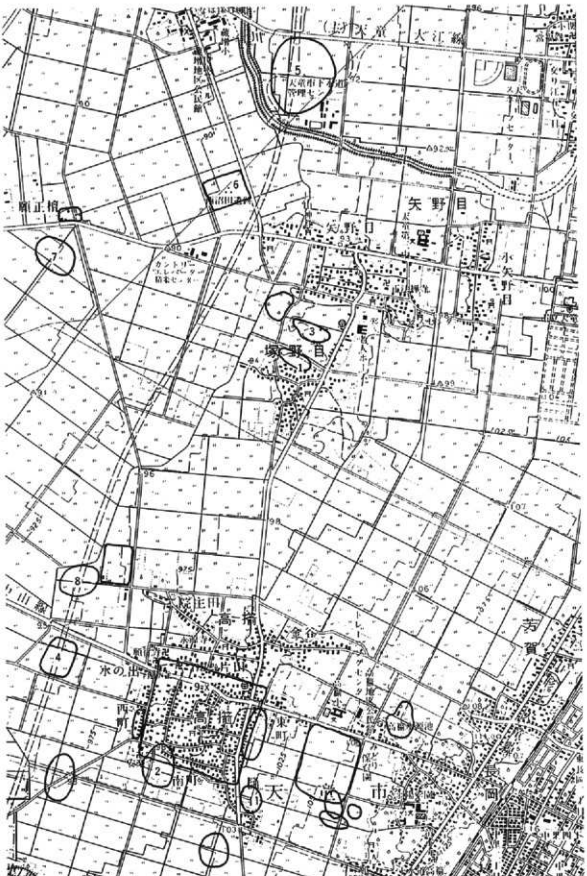
扇状地の扇端部に遺跡が形成され始めるのは、縄文前期に属するものも若干みられるものの、遺跡数が増加するのは縄文時代後期以降である。

そのような中で、高擶南浦遺跡(2)で採集されている縄文時代中期の土器片は、立谷川扇状地扇端部においては最も古い時期に属するものであり、今後この時期の遺跡が発見されることが期待される。

塚野目A遺跡の北約300mに位置する矢口遺跡(3)は縄文時代の後期から晩期にかけての遺跡である。昭和43年に小規模ながら発掘調査が行われ、竪穴住居跡が3棟検出されたほか、土器、石器等が出土している。

ほぼ同じ時期に属する遺跡としては、砂子田遺跡(4)がある。平成10年度に、山形県埋蔵文化財センターにより、4,400m²にわたって発掘調査が実施され、良好な状態で遺構・遺物が検出されている。遺跡は、中央を流れる河川跡によって南北に分断されるが、北側は縄文時代晩期、南側は縄文時代後期と、時期によって占地が分かれる。南側は、中州が形成されていたと考えられ、そこに竪穴住居跡が4棟検出されている。

弥生時代の遺跡は、天童市全体でも多くはない。この時期に属するものは、成生地区にやや多く分布するが、塚野目周辺では塚野目A遺跡(1)で土器片が若干数出土しているほか、上記の砂子田遺跡で弥生中期といわれる土器が出土しているのみである。両遺跡ともに遺構に伴うものではなく、単独の出土であることから、集落の様相については不明な部分が



第２図　周辺の遺跡（Ｓ＝１：20,000）

多い。

古墳時代では、塚野目A遺跡で古墳時代前期の土器片が出土しており、それに後続する遺跡として、蔵増押切遺跡(5)や、西沼田遺跡(6)、願正壇遺跡(7)等がある。

蔵増押切遺跡では、40棟を超える竪穴住居跡が検出されている。時期的には、古墳時代中期の南小泉式期に属するものとされているが、切り合い関係が著しいことから、数期にわたる建て替えが行われているものと考えられる。

西沼田遺跡は、古墳時代後期の遺跡である。地下水位が高いため、木製遺物等の保存状態が大変良好で、大量の木製農耕具、掘立柱建物の建築部材等が出土している。これら木製遺物群の重要性に鑑み、約33,000㎡が国の史跡として指定されている。遺跡は昭和60年度に調査された中央部分が自然堤防上の微高地となっており、東西両側に向かって低くなっている。本遺跡のほぼ中央には、南北方向に建物が配置されていたようで、その両側からは、未だ明確な建物跡等は確認されていない。また、それに伴う生産遺構も未発見である。

願正壇遺跡は西沼田遺跡とほぼ同時期の遺跡であり、同様に建築部材や木製農耕具等が出土している。

奈良・平安時代については、遺跡数は多いものの、発掘調査が行われていないためこの時期の様相については不明な点が多い。

そのような中で、唯一調査の行われているのが中袋遺跡(8)である。

中袋遺跡では、9世紀後半ころから10世紀前半ころにかけての遺構・遺物が検出されている。遺構は、溝で区画された中に掘立柱建物跡3棟が目立つくらいであるが、遺物は特徴的なものが出土している。墨書のある須恵器、風字硯、朝服の腰にめぐらす革帯、腰帯に付着する石帯等が出土しているが、これらは当時の官位制を表すものであるという。現在、神奈川県横浜市港南区最戸町千手院に所蔵されている青銅製阿弥陀如来像の背面に、「出羽国最上郡府中庄外郷」という陰刻があることから、往時、この地が最上郡の府中＝郡衙の地であったことが推定される。その年代が、中袋遺跡出土遺物と整合するような9～10世紀代までさかのぼるのかどうかは不明であるが、官との関係を示唆する遺物の出土は大変興味深い。

蔵増押切遺跡では、鎌倉時代に属するとされる遺構・遺物も検出されている。

掘立柱建物跡21棟、井戸跡4基等が検出されているが、特に注目されるのが、2間×4間の総柱の建物で、かつ両側に軒庇をもつ構造のものである。また、覆屋をもつ井戸も検出されている。遺物の年代観から、おおよそ13世紀に属するものと考えられ、建物の構造等が一般の建物と異なり、豪族館的な様相をもつことから、成生庄との関連性が問題となろう。

中世、特に室町以降は天童市全域が、最上氏の一族といわれる天童氏の領地に入った時代である。この時期、市内各所に館や城が築かれている。

塚野目Ａ遺跡の南約２kmに所在する高擶城跡(9)もそのひとつである。城の起源は、南北朝時代に斯波兼頼の４男義直が入封して築城したのが始まりといわれる。その後、文明年間（1469～1486）に現在のようなかたちに整備されたと考えられている。天正12年の天童氏と最上氏との合戦の頃は、中山氏が天童氏の旗本として居を構えていた。天童氏滅亡後は、最上氏の家臣である斎藤伊予守が入城したが、最上氏の改易に伴い廃城となっている。その後、幕末には秋元藩の陣屋が旧二の丸西側におかれ、明治初期まで家中衆が近くに居住していたとのことである。

城跡は、現在も当時の区割りに従って集落が形成され、堀跡や土塁跡のほか、堀端、楯の内等の地名から往時を偲(しの)ぶことができる。

第Ⅱ章　調査の概要

塚野目A遺跡は、今回の調査以前に２度発掘調査が行われている。

初めての調査は、昭和47年に、排水管設置工事に伴い土器等が出土したことから、破壊される可能性のある部分だけ緊急に行われた小規模なものである。調査箇所は、今回の調査箇所から若干北にずれた集落に近い所である。

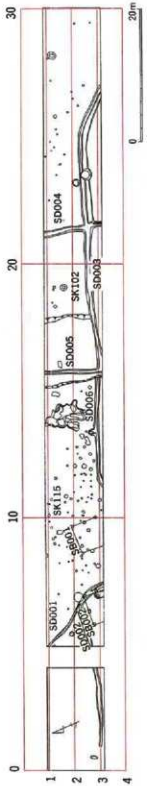
調査の成果としては、竪穴住居跡が１棟検出されたほか、溝跡等が確認されている。遺物は弥生土器（天王山式）、古墳時代前期塩釜式、奈良・平安時代の土師器、須恵器等が出土し、多時期にわたる複合遺跡であることが確認された。

平成７年には国の補助を受け、西沼田遺跡の関連遺跡の調査として、確認調査を実施している。

竪穴住居跡が１棟のほか、土坑、溝跡等が確認されている。遺物は、昭和47年度の調査同様、塩釜式から南小泉式にかけての土師器が出土し、ほかに須恵器、赤焼土器、鉄鏃等が少数出土している。

今回実施した発掘調査は、市道山形・矢野目線の車道部分、幅員９m、延長120m、面積1,080㎡を対象に、４m方眼のグリッドを、東西方向に１～30区、南北方向に１～４区設定し、発掘調査を実施した。調査は、樹木等の伐採の終わったところから順次実施し、はじめに西側１/３、次いで東側１/３、最後に中央部分１/３という順序で実施した。30～50cmの耕作土の下層が黄褐色土の遺構面となっており、暗渠等による削平、攪乱が若干みられたものの、遺構の遺存状態は概ね良好であった。

遺構は、掘立柱建物跡２棟、溝跡が数条検出されたほか多くの土坑が検出された。遺物は土師器、須恵器がほとんどであり、ほかに赤焼土器が若干出土している。小破片が多く、復元できるようなものは少なかった。また、遺構外からの出土であるが縄文時代の石器が少数出土している。



第３図　遺構配置図

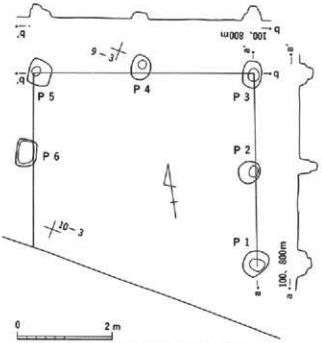
第Ⅲ章　遺構と遺物

第１節　掘立柱建物跡

００１号掘立柱建物跡（第４図）

９－３、10－２・３区に位置する。南側は調査区外となっている。桁行２間で、梁行２間以上で、桁行長456cmである。柱穴の平面形は隅丸方形～楕円形を呈し、長軸で50cm前後である。深さは、確認面から30～35cmである。柱間寸法は桁行で228cm、梁行で200cmである。主軸はＮ－３°－Ｅである。

図示できる遺物はない。



第４図　001号掘立柱建物跡実測図

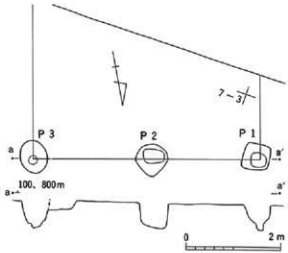
００２号掘立柱建物跡（第５図）

６・７－３区に位置する。南側は調査区外となっている。

東南に存在すべき柱穴は、溝跡と重複していることもあり、確認できなかった。桁行間480cm、柱間寸法は240cmである。主軸はＮ－５°－Ｅである。柱穴の平面形は隅丸方形を呈し、長軸で60cm程である。深さは、確認面からで約55cmで、かなり大型である。Ｐ３は上層で攪乱を受け、さらに溝跡が重複しているため、確認面での平面形は不明であるがおそらくＰ１、２同様隅丸方形を呈するものと想定される。

掘立柱建物跡と溝跡との切り合い関係は、Ｐ３が上層で攪乱を受けていたことから、不明である。

図示できる遺物はない。



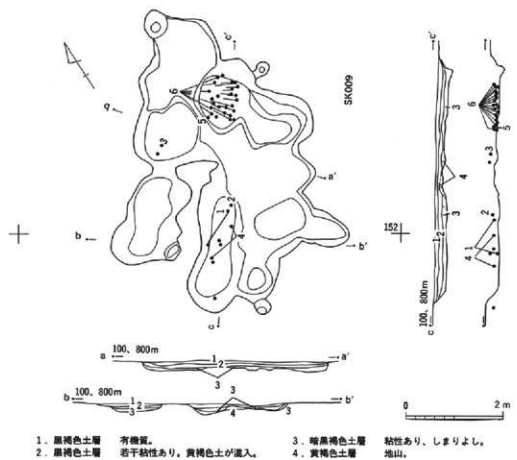
第５図　002号掘立柱建物跡実測図

第２節　土坑

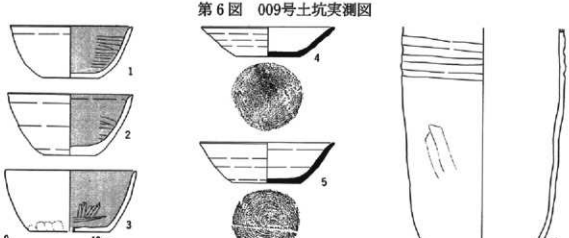
００９号土坑（第６図、第７図）

14－１～３、15－２・３区に位置する。

平面形はかなり不正形を呈する。底部の形状及び遺物の出土状態からは、本来的にいくつかの土坑が切り合ったものであると想定されるが、平面及び土層断面の観察からは切り



第６図　009号土坑実測図



第７図　009号土坑出土遺物

合い関係を確認できなかった。

確認面での平面形は長軸で686cm、単軸で306cm、深さは確認面から８cm～30cmである。

１～３は土師器の坏である。いずれもロクロ整形によるもので、内面はヘラミガキを施したうえ、黒色処理を行っている。底部から口縁にかけての立ち上がりは比較的直線的に立ち上がる。

４・５は須恵器坏である。４は口縁径に対して器高が小さい。器形は底部から外傾しながら直線的に立ち上がる。５は外傾しながら立ち上がり、口縁部で若干外反する。

６は土師器の甕である。口縁部と底部を欠損するのみで、ほぼ全体の形状がわかるものである。胴部に膨らみがなく、直線的に立ち上がる。内外面ともに剝落が著しいが、胴部外面に一部ヘラケズリを確認できる。

１０２号土坑（第８図、第９図－１）

19・20－２区に位置する。

平面形は楕円形を呈し、長軸112cm、単軸108cmである。深さは確認面から18cmである。

遺物は図示できるものが１点出土している。

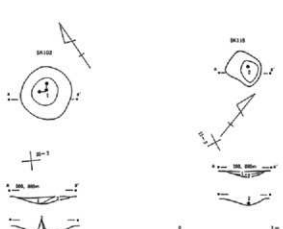
１はロクロ土師器の高台付坏である。外面底部近くはヘラケズリ、内面はヘラミガキの後、黒色処理を施している。底部は回転糸切りで切り離した後、高台を接着している。

１１５号土坑（第８図、第９図－２）

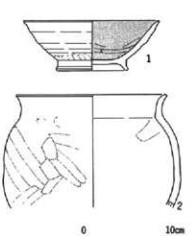
11－２区に位置する。

平面形は隅丸方形を呈し、長軸で72cmである。確認面からの深さは12cmである。

２は土師器の甕である。胴部が膨らみをもち、口縁が外反する。器壁は比較的厚手である。内外面はともにヘラケズリを施している。口縁部径16cmを測る。



第８図　102・115号土坑実測図



第９図　102・115号土坑出土遺物

第３節　溝跡

００１・００２号溝跡（第10図）

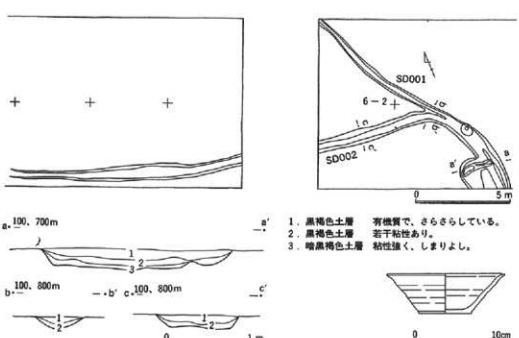
１～８－１～４区に位置する。

７・８－３・４区で、楕円形の土坑状の落ち込みから、Ｎ－32°－Ｗ方向にむかい、７－３区で二股に分かれ、001号溝跡はそのままの方向に、もう一方の002号溝跡はＮ－80°－Ｗへと向きを変える。流れの方向は、地形同様南から北、東から西方向である。幅は、001号溝跡が約40cm、002号溝跡が約70cmとほぼ一定である。２条の溝の関係であるが、切り合い関係等はみられず、同時期に形成されたものと考えられる。おそらく、排水溝としての機能を持つものであろう。

遺物は図示できるものが１点出土している。赤焼土器の坏で、ロクロ整形、底部回転糸切りによる。底部から外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部で若干外反する。器壁はかなり薄手である。

００３～００６号溝跡（第11図）

003号溝跡は12～27－１～４区に渡り、検出長で46mを測る。幅128cm～60cm、深さ約25cmである。22～27－３区で溝の北側に沿って、幅約50cmの畝状の溝が走っている。方向は西から東に傾斜し、Ｎ－44°－Ｗから25－３区でＮ－70°－Ｗに向きを変える。16～18区において、地形が窪地状となるため、16－３区でいったんとぎれるが006号溝跡とは一連のものであると考えられる。この、003号溝跡と直行するように004号溝跡、005号溝跡の２本の溝

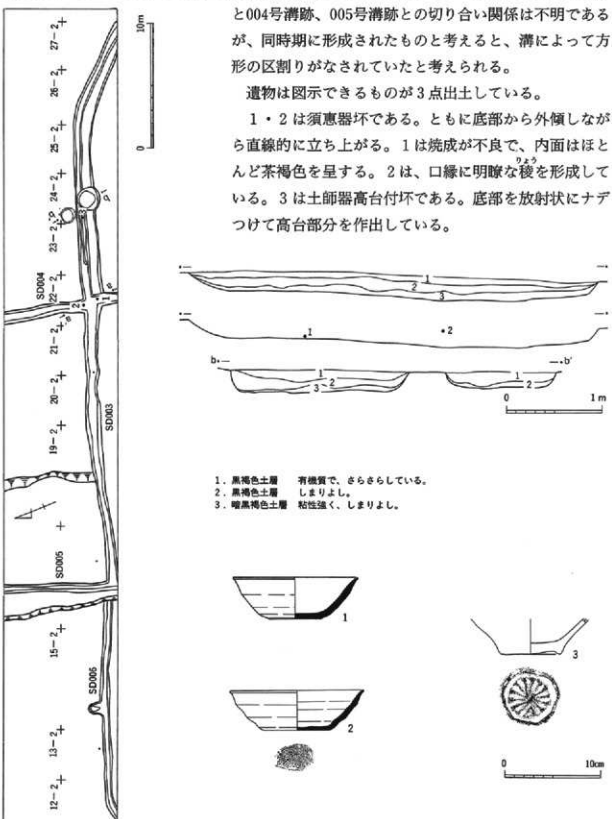


第10図　001・002号溝跡実測図及び出土遺物

跡が交差している。両溝間の距離は22mである。004号溝跡は幅約100cm、深さ約20cmで、方向はN－15°－Eを示す。005号溝跡は幅約70cmで、方向はN－23°－Eを示す。003号溝跡と004号溝跡、005号溝跡との切り合い関係は不明であるが、同時期に形成されたものと考えると、溝によって方形の区割りがなされていたと考えられる。

遺物は図示できるものが3点出土している。

1・2は須恵器坏である。ともに底部から外傾しながら直線的に立ち上がる。1は焼成が不良で、内面はほとんど茶褐色を呈する。2は、口縁に明瞭な稜(りょう)を形成している。3は土師器高台付坏である。底部を放射状にナデつけて高台部分を作出している。



第11図　003～006号溝跡実測図及び出土遺物

第4節　遺構外出土遺物

土器（第12図）

1はロクロ土師器の坏である。底部から外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁で若干外反する。底部は回転糸切りであるが、磨耗が激しい。2・3は須恵器坏である。2は胴部が丸みを帯びながら立ち上がり、口縁部で若干外反する。底部は糸切り痕が残る。3は胴部に若干の膨らみをもち、外傾しながら直線的に立ち上がる。器高が高く、灰褐～赤褐色を呈する。底部を回転糸切りにより切り放した後、2重に台を張り付けている。

4は甕の胴部から底部にかけての破片である。内外面ともにヘラケズリ痕が明瞭に残る。器壁は厚手である。赤褐色を呈する。

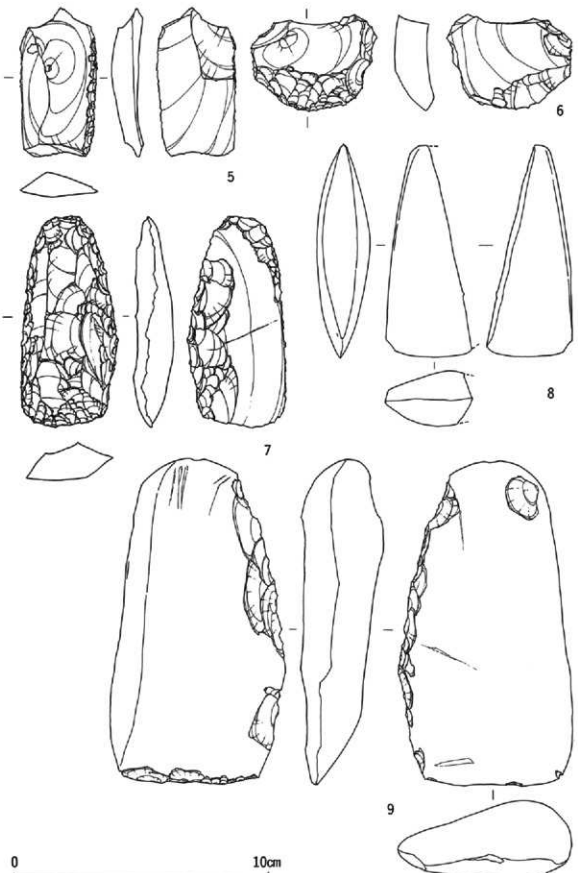
石器（第13図）

5～9は石器である。いずれも原位置の出土ではなく、流れ込みによるものと考えられる。

5は削器である。横長剥片を素材とし、主要剥離面の末端縁部に調整剥離を施して刃部を作出している。長さ59㎜、幅30㎜、厚さ12㎜。6は掻器である。横長剥片を素材としている。主要剥離面の縁辺に急斜度調整剥離を施し、刃部を作出している。長さ38㎜、幅50㎜、厚さ15㎜。5・6ともに主要剥離面側に刃部を作出していることが特徴的である。7は石篦である。横長剥片を素材とし、背面の全縁及び主要剥離面の一部に調整剥離を施している。長さ84㎜、幅39㎜、厚さ16㎜。5～7はいずれも珪質頁岩製である。

8・9は石斧である。8は磨製の両刃石斧である。表面の剥落が著しく、磨き痕はまったく観察できない。約1/3程を欠損する。長さ84㎜、厚さ22㎜、幅は現存で34㎜である。9は、偏平な礫を素材とし、磨きにより整形した後、右側縁の余分な部分を調整剥離により削除し、また刃部の調整を行っている。右側縁、刃部にみられる調整剥離は磨き痕を切る関係にあり、再生加工を意図したものであろうか。長さ129㎜、幅69㎜、厚さ32㎜。

第12図　遺構外出土遺物（1）



第13図　遺構外出土遺物 (2)

第IV章　ま と め

第１節　遺構について

今回の調査で発掘された遺構は、掘立柱建物跡２棟のほか、土抗、溝跡等である。道路の調査ということで、細長い調査区であったため、遺跡の全体像についてはなお、不明の点が多い。

掘立柱建物は、調査区の西側、６～９－２・３区で検出されている。２棟とも南側部分が調査区外になっており、全体の形状は不明であるが、主軸がほぼ同一方向を指す。柱間は、若干広めで、2.00m～2.40mである。002号掘立柱建物跡は、001号溝跡と切り合い関係を有するが、上層で攪乱を受けており、前後関係については確認できなかった。

溝跡は全部で６条確認された。いずれも地形の傾斜に従い、南側から北側に向かって流れていることから、排水用の溝として利用されたものかと考えられる。調査区東側で確認された003～006号溝跡は、一直線をなす003号溝跡と006号溝跡に対して、004・005号溝跡がほぼ直角的に交差し、方形の区割りを形成しているところが特徴的である。ただし、区割りの軸と掘立柱建物跡の軸とは一致せず、また、溝跡と柱穴が切り合い関係を有することから、若干の時期差を有するものと考えられる。

第２節　遺物について

今回の調査では、土師器、赤焼土器が出土している。出土量は少ないが、ここでは、ややまとまって出土している須恵器坏について若干の検討を行いたい。

須恵器坏は、底部の切り離しがすべて回転糸切りによる。切り離し後の調整は認められない。器形は、第12図２は、体部が内湾しながら立ち上がり、その他のものは若干内湾気味になるものの、外傾しながら直線的に立ち上がる。第６図４はほかのものと比べて、口径に対する器高が小さい。

法量的には、口径が131㎜～141㎜、底径が50㎜～70㎜、器高が31㎜～44㎜である。口径は比較的まとまるものの、底径は50㎜強のものと、70㎜弱のものの二つに分かれる。器高は、第６図４が31㎜と小さいが、その他のものは40㎜前後に納まる。個々にばらつきが大きく、それほど意味のあるまとまりを見出すことは困難である。口径と器高の比をみると第11図１が１：2.98、第６図４が１：4.51、第６図５、第11図２、第12図２は１：3.26～3.45の間にまとまる。

年代的には、第６図５及び第11図１・２は器高が大きく、若干内湾気味に直線的に立ち上がる体部を有するという特徴から、９世紀代の後半に位置づけられようか。第６図４及び第12図２は、それに対して、内湾しながら立ち上がる体部、口径に対する器高の小ささ

等の古い要素を有することから、9世紀の前半と考えられる。

引用・参考文献

天童市史編さん委員会1978『天童市史別巻上　考古・地理編』天童市

渋谷孝雄1982『境田Ｃ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第62集

渋谷孝雄1984『境田Ｃ'・Ｄ遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第76集

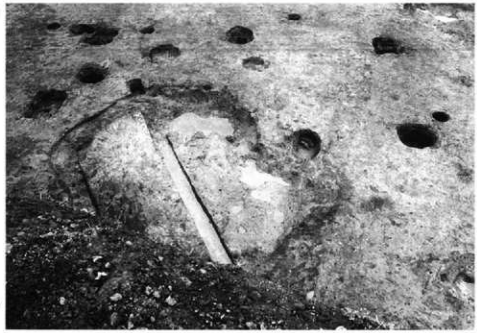
天童市教育委員会1995『西沼田遺跡関連発掘調査報告書』天童市埋蔵文化財調査報告書第12集

佐藤庄一・須賀井明子1998『平野山古窯跡群第12地点遺跡第２次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第52集

阿部明彦・水戸弘美1999「山形県の古代土器編年」『第25回　古代城柵官衙遺跡検討会資料』古代城柵官衙遺跡検討会

写真図版

①



００１号掘立柱建物跡

②

００２号掘立柱建物跡

③

００９号土坑

④

００９号土坑遺物出土状況(1)

⑤

００９号土坑遺物出土状況(2)

⑥

００１・００２号溝跡

⑦

００２号溝跡

⑧

００３号溝跡

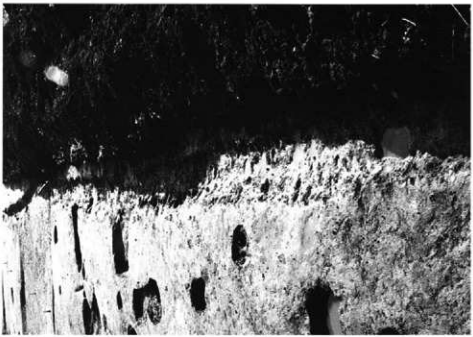
⑨

００４号溝跡

⑩

００５号溝跡

⑪



００６号溝跡

⑫

調査風景

第７図１

第７図２

第７図３

第７図４

第７図５

第７図６

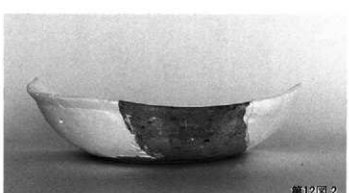
第９図１

第10図

第11図1

第11図2

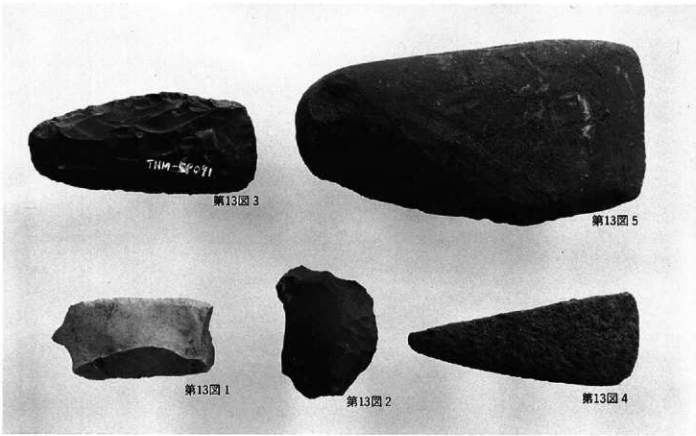
第12図1



第12図2

第12図3

第11図3



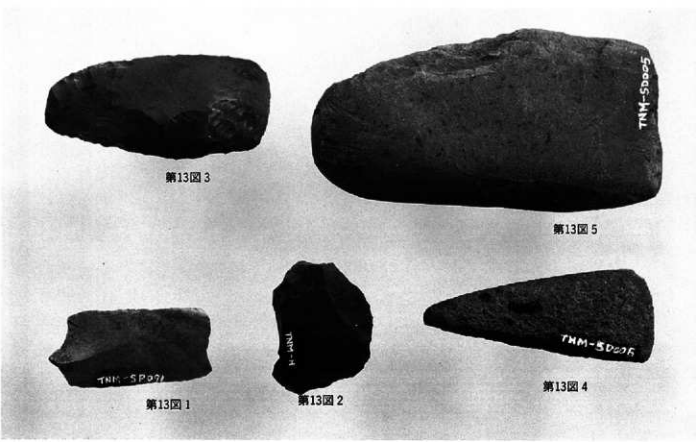
第13図 3

第13図 5

第13図 1

第13図 2

第13図 4



第13図 3

第13図 5

第13図 1

第13図 2

第13図 4

報告書抄録

ふりがな	てんどうしつかのめAいせき
書名	天童市塚野目A遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	天童市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	押野一貴
編集機関	天童市教育委員会
所在地	〒994-8510　天童市老野森一丁目1番1号
発行年月日	平成11年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つかのめいせき 塚野目A遺跡	てんどうしおおあざ 天童市大字 つかのめあざし 塚野目字岸 のめきたうち の目北地内	6210	46	38° 20′ 56″	140° 21′ 00″	19980921～ 19981028	1,080m²	市道山形・矢野目線の整備に係る事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
塚野目A遺跡	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡　2 土坑 溝跡	土師器、須恵器、 石器	特になし

天童市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集

天童市塚野目A遺跡

平成11年3月31日

編　集　天童市教育委員会

発　行　天童市建設部建設課
天童市教育委員会
天童市老野森一丁目1番1号
TEL　023-654-1111(代)

印　刷　豊田太印刷所
TEL　023-686-2518(代)